福田ドクトリン記念碑除幕式典を開催

（左から）駐日フィリピン共和国大使 ホセ カスティリョ ラウレル ５世閣下、駐日シンガポール共和国大使 ピーター タン ハイ チュアン閣下、福田康夫元内閣総理大臣、白石勝己アジア学生文化協会理事長、佃吉一 ABK 学館理事長、杉浦正健元法務大臣

2021 年 11 月 24 日、公益財団法人アジア学生文化協会（ABK）では、福田康夫元総理やシンガポール大使ピーター タン ハイ チュアン閣下、フィリピン大使ホセ カスティリョ ラウレル５世閣下ご臨席のもと、ABK 敷地内に建立された福田ドクトリン記念碑の除幕式典を開催しました。福田ドクトリンは 1977 年に当時の福田赳夫総理が表明した外交原則で、2018 年にフィリピンに記念パネルが設置されましたが、今、改めてその意味を見つめ直す意味も込めて、有志の方々による日本版記念碑の計画がスタートし、今回の除幕式典開催に至りました。
本誌では当日の登壇者皆様のご挨拶をご紹介します。（掲載にあたり、ご本人に当日のお話への加筆・修正等をお願いいたしました。）

除幕式ご挨拶

公益財団法人アジア学生文化協会 理事長 白石勝己

元内閣総理大臣 福田康夫様、駐日フィリピン共和国大使 ホセ カスティリョ ラウレル５世閣下、駐日シンガポール共和国大使ピーター タン ハイ チュアン閣下、ご列席の皆様。

本日は私ども公益財団法人アジア学生文化協会と学校法人ABK学館による「福田ドクトリン記念碑」除幕式にご参列いただき、誠にありがとうございます。まず初めに、なぜ私どもがこの「福田ドクトリン記念碑」を建てることとなったかご説明をさせていただきたいと思います。

ご存じの通り「福田ドクトリン」は第67代内閣総理大臣である福田赳夫元首相が1977年に東南アジア歴訪の最後の地、フィリピン・マニラで表明した日本の東南アジアに対する外交原則です。その内容は

（1）日本は軍事大国とならず、世界の平和と繁栄に貢献すること
（2）心と心の触れ合う信頼関係を構築すること
（3）日本はASEANと対等なパートナーとしてASEAN諸国の平和と発展に寄与すること

の3原則として知られ、東南アジア諸国での高い評価を得て、今日に至っています。

今から3年ほど前、2018年に、福田ドクトリン40周年記念として、フィリピンのマニラホテル内に祈念パネルが設置されました。その後、日本でも、これと対になる記念碑を設置できないか、と日本の有志の方々から発案されました。そこで長年東南アジアから多くの留学生を受け入れ、各国の日本留学同窓会とも関係が深いということで、私どもにお声がけを頂きました。私たちとしても、大変名誉なことであり、

ぜひ記念碑を設置させていただきたいと申し出て、今日の除幕式を迎えることができた次第です。

同ドクトリンは心と心の交流により、平和外交を希求する歴史的な文章であり、普遍的な意義を有していると信じます。これは国や民族、宗教を超え「互恵協力」により「人間的和合」を求めるという、私たち協会の理念と合致するところであり、アジアの将来を担う若者たちがこの記念碑に触れ、平和と友好の大樹として育つよう願います。

もう一つお話したいことがあります。本日ご臨席いただいている福田康夫先生が政権を担っておられた2008年に「留学生30万人計画」を提唱されました。これは当時10万人だった留学生数を2020年までに30万人にしようという計画で、その後、様々な施策が行われ、目標年の2020年より2年早く2018年には30万人という目標が達成されました。我々留学生教育にたずさわっている者は、この施策によってたいへん勇気づけられました。しかし、現在世界的な新型コロナウィルス感染の影響で、海外からの渡航は厳しく制限され、日本の留学生の数は20万人代まで減っています。今後、コロナ禍がおさまれば、また徐々に留学生の入国がはじまると思われますが、この未曾有の困難を乗り越え、さらに数も質も充実させた留学生受け入れに努力していくことを、ここにお約束させていただきたいと思います。

最後に、この間、記念碑設置に当たり、福田康夫先生、外務省OBで元中国大使の谷野作太郎様、同じく元インドネシア大使の塩尻孝二郎様には親身なご指導、ご助言をいただきました。ここに心より感謝申し上げ、私のご挨拶を終わらせていただきます。ありがとうございました。

今、なぜ「福田ドクトリン」記念碑の建立か
～ドクトリンの今日的意味～

白石勝己

40 年以上も前の「福田ドクトリン」の記念碑をなぜ今、建立するのかと訝る向きもあるかもしれない。それは、私の除幕式の挨拶でも述べたように、2018 年にフィリピンで開催された「福田ドクトリン 40 周年記念式典」で、マニラホテルに埋め込まれた記念プレートのペアとなる碑を日本でも設置したいという、関係有志の意向を受けたもので、場所の選定などで多少時間がかかり、今日に至ってしまったという訳である。しかし、それではなぜマニラで 40 周年記念式典が開かれたか、という理由の説明までには至っていない。その理由はもちろん、40 年を経てもなお東南アジアの国々で、その内容が高く評価されているから、ということになるだろう。では、なぜそのように高く評価されているのか、という理由について考えてみたい。

当時、1970 年代初めは米中接近、中ソ対立、ベトナム戦争終結とインドシナ 3 国の社会主義化、日本の経済進出のオーバープレゼンスなどが問題になっていて、日本外交独自の立ち位置が強く求められた時代での、同ドクトリン表明だった。流動的で複雑な世界情勢の中にあって、当時の福田赳夫政権は「全方位平和外交」という方針を打ち出し、初の外遊先である東南アジア最終訪問地フィリピン マニラで、この 3 原則を発表した。国家間の外交交渉というと経済力、軍事力を背景に、それぞれ国益を背負って熾烈にしのぎを削り合うことが普通のことなのだろう。そのような中で、平和憲法を掲げる国として、軍事力に拠らず、「心と心」つまり信頼しあう友情関係を基礎とし、平等なパートナーとして互恵協力関係を築こうとの訴えは、関係国に深い感銘を与え、時代に左右されることのない普遍性を獲得したと言えよう。

さて、翻って現在を見ると、対外的には中国の国際的プレゼンスの増大と米中対立、日中・日韓関係の険悪化、世界的には保護主義の台頭など、一方、国内的には経済成長の停滞、日本の国際的プレゼンスの低下などが顕在化し、そこに環境・気候変動、新型コロナウィルス、貧困格差など地球規模の問題が覆いかぶさる。そんなとき、単純な二項対立で黒白色分けする論理は、わかりやすく勇ましくも聞こえるが、しかし、世界の事象の多くは、グラデーションになって存在し分け目は判然としないことが多い。経済でも軍事でも、弱腰・丸腰でいいなどと決して思わないが、あまりにも一方的に大きく傾く議論は均衡をくずし立ち位置を危うくすることだろう。外交、安保を語るにしても、このような時だからこそ、福田ドクトリンのフィロソフィーをしっかり再認識し、言うべきことはしっかり言い、聞くべきことはきちんと聞くという姿勢が必要なのだと思う。

福田康夫 元内閣総理大臣[i]

今日はお寒い中ようこそお出でいただきました。公務大変お忙しい中を駐日シンガポール大使[ii]、駐日フィリピン大使[iii]にお出でいただき、また、遠方からお越しいただいた方々もいらっしゃり、お集まりいただいた皆様にたいへん感謝いたします。

まずは何よりも、この記念碑をここに作っていただいた公益財団法人アジア学生文化協会に、代表して白石理事長がご挨拶されましたが、心から御礼を申し上げたいと思います。これほど立派な記念碑を作ってくださるということは、私も想像していなかったのでありますが、作ってくださった意味もいま伺わせていただきまして、ありがたいお話だと思っております。

「福田ドクトリン」と言われますけれども、これは言ってみれば、1977年当時の総理大臣[iv]が日本の対外政策の一環として、このような考え方でアジアの国々とお付き合いをしていく、というお約束の表明で、国家としての約束ということになります。ですから個人的なものではないと思います。そのように考えれば、私共でここに碑を建立することの正当性とか、そういうことについての決定権はないのであります。そこで関係するいろいろな方々と相談をさ

せていただき、その結果、先ほどお伺いした白石理事長のようなご趣旨であるならばお受けすべきであろうという話になり、今日ここにご披露するということになりました。

佐藤次郎アスジャ・インターナショナル顧問（左）、
田島高志元駐カナダ大使（中央）と福田康夫先生

そもそもこの福田ドクトリンの中身につきましては、今日お集まりいただきました皆様の中にも関係される方がいらっしゃいます。先ほど白石理事長からもご紹介がありました谷野元中国大使[v]は、当時アジア局の責任者としてこのドクトリンの中身の大宗を作成してくださった方であり、本日はそういった関係の方々にもお集まりいただき、ありがたく思っている次第であります。

いずれにしても、こういうことが実現するのは、やはりこの財団の関係の皆様のご発意でございますし、またその気持ちを我々十分に受け止めなければいけないというように思います。ドクトリンの中身につきましては、私は今でも通用するものであり、そしてこれからの日本の大きな方向性としても大事にしていかなければいけない内容であると思います。

そういう意味で、40 年経って改めてその内容をもう一度噛みしめてみる必要があるのではないかと、今はそういう時期なのではないかと思っております。そういったこともみなさまにこの際お考えいただいて、この除幕式に参加していただきたいと思っております。いずれにせよ、皆様方に今日、こうやって記念すべき時にお集まりいただいたことを心から御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

i　福田康夫　第 91 代内閣総理大臣（2007 年～ 2008 年）
ii　ピーター・タン・ハイ・チュアン閣下
iii　ホセ・カスティリョ・ラウレル五世閣下
iv　福田赳夫　第 67 代内閣総理大臣（1976 年～ 1978 年）
v　谷野作太郎（外務省アジア局長 1987 年、駐インド大使 1995 年、駐中国大使 1998 年）

駐日シンガポール共和国大使 ピーター タン ハイ チュアン閣下

みなさまこんにちは。福田康夫元総理大臣、アジア学生文化協会白石理事長、そして関係者のみなさま、今日アセアン東京委員長としてこの除幕式にお招きいただいたことを心からお礼を申し上げます。

まず、福田ドクトリンは日本と東南アジアとの関係を示す大変重要なシンボルであるということを申し上げます。福田ドクトリンは1977年に当時の総理大臣であった福田赳夫氏が発表されました。その内容は日本が東南アジアの国々と平等なパートナーとして、互恵的な、心と心の関係を築く、ということが基本となっています。

福田ドクトリンが大変重要である理由がもう一点あります。それは1970年代にまだ冷戦が続いていた当時、東南アジアを一つの地域として考え、捉えていただいたことです。そして日本はその経済力を活用して、東南アジアの永続的平和と安定を築くために貢献すると誓ってくださいました。

この考え方はおおいに未来を見据えたものであり、今日に至るまで日本のアセアン外交の大変重要な、そして基本的な枠組みとなっています。現在、東南アジアの国々は日本の企業や投資に対して、

大変大きな経済的な潜在力と可能性を提供しています。東南アジアはこれまで平均年間５％の成長を続けており、世界で最も業績の高い、パフォーマンスの高い地域となっています。

福田康夫先生とピーター タン ハイ チュアン閣下

私は、日本のみなさんが東南アジアの魅力を十分に理解してくださっていると確信しています。今、外は大変寒く感じるようになってきましたが、ここで三点、私は日本とアセアンの関係がこれからさらに重要となり、より温かく育まれる分野をご紹介したいと思います。

まず私たちはお互いに協力して新型コロナウィルス感染症のパンデミックから、より強靭に回復するよう努力を始めるべきです。アセアンと日本は比較的新型コロナウィルス感染症の対応には成功を収めて参りました。その理由は、私たちがともに世界の供給網を発展させるとともに、保健分野での協力を倍増させてきたからです。東南アジアの国々に大変多くのワクチンを提供してくださったことに対して、アセアン加盟国を代表して私から日本にお礼を申し上げたいと思います。アセアンと日本はさらに協力をすることが可能です。今後、特に経済の回復と同時に、安全に配慮しつつ渡航を再開してゆかなければなりません。

二つ目の点ですが、アセアンと日本はこれからも新しい分野で革新的な協力を行っていくことが必要です。アセアンと日本はスマートシティー ネットワーク構想に関して緊密な協力を続けて参りました。このスマートシティーに関する協力では、日本企業も一緒になって多くの民間部門が技術的なソリューションを見出しながら、東南アジアでの開発をすすめています。私たちは今後もこのような協力をデジタル化などイノベーティブな分野で続けるべきです。

三点目の協力分野としては気候変動が上げられます。日本とアセアンは気候変動に関する重要な点で多くの協力が可能だと思います。アセアンと日本はそれぞれが開発した技術と能力によって、例えばクリーン水素の技術、また気候環境分野での金融や投資などでも多くの協力が可能です。

今日、福田ドクトリンの記念碑の除幕式という特別な場で、皆さんにもう一つお話ししたいことがございます。それは経済協力のほかにもう一点、日本と東南アジアが心と心の関係をさらに強化するために、福田ドクトリンのもとで人と人とのつながりを強化する必要があります。日本は東南アジア青年の船（Ship for Southeast Asian and Japanese Youth Program）によって学生の交流プログラムを続け、日本とアセアンの関係を強化してまいりました。ここからちょっとだけ日本語でお話しします。今日のイベントは私にとって特別な意味があります。シンガポールで第三言語として日本語を勉強した15歳の青年として、私は石川県金沢市で行われた学校交流へ参加するため初めて日本に来ました。その時、日本の「おもてなし」を身をもって知りました。そのあと仕事とプライベートで何度も日本に来ました。私はまさに福田ドクトリンの卒業生であり、恩恵を受けた一人です。

最後にもう一言お話しさせてください。日本は常にアセアンの国々との関係を築く場においてパイオニアであり続けてきました。福田ドクトリンが発表されたのは日本がアセアンのダイアローグパートナーとなってからわずか4年後のことでした。またアセアンが設立されてからわずか10年後のことでした。福田ドクトリンは、日本が国として初めてアセアンのパートナーとなり、重要なコミットメントとして表明されたものです。それは日本が先見の明のある外交を行った、その模範となり先例となりました。

ここでこの場をお借りしまして、私から福田ドクトリンが日本の心と心の関係をアセアンと築くにあたって、さらにその影響力を続けてくだされればと願っております。

ご静聴ありがとうございました。

Ⅱ レセプション ご挨拶

成澤廣修 文京区長

ご紹介いただきました地元の文京区長の成澤でございます。今日は福田ドクトリンの除幕式にお招きいただきましてありがとうございます。この地にしっかりと福田ドクトリンの精神を根付かせることが、ABK のみなさんと私ども地元自治体が行っていかなければならないことなのかなと思いを新たにさせていただきました。

私どもも多文化共生ですとか留学生支援ですとか、様々なことを区の業務としても行っておりますが、ご案内のように文京区内には東京大学やお茶の水女子大学、そしてアジアからの留学生の非常に多い東洋大学や拓殖大学といった大学が十九ございます。現在、先ほどもお話があったように、現状ではなかなか留学生が戻って来られないので若干減ってはいますが、おそらく都内の中でも留学生の多い自治体の一つだろうと思います。

新型コロナウィルスによって、留学生のみなさんたちと交流ができない状態が続いていますが、ABK のみなさんたちのご協力のおかげで、この 2 年間はオンラインによる区民との留学生の交流をやっていて、来月 19 日だったと思いますが、今年もこちらの留学生のみなさんと区民の交流会をさせていただく予定にしております。

今朝、福田ドクトリンを改めてインターネットで検索して全文を読み返してみましたが、最初に「多様性」という言葉、そして「よき理解者」という言葉も出てきて、先ほど福田元総理もお話しでしたが、今の時代でもしっかりと活かすことの出来る考え方であって、これを地域に実装していくべく、ABK のみなさんたちと我々自治体も努力してまいりたいと思います。

本日は誠におめでとうございます。

杉浦正健 元法務大臣[i]

ご紹介いただきました杉浦でございます。

私は老輩ながら、関係者の一人としていろいろやらせていただいたわけですが、はるか後輩である協会職員からの命令でございますので、一言ご挨拶させていただきます。今日は駐日フィリピン大使ホセ カスティリョ ラウレル閣下がお見えでございます。ご祝辞をいただいた駐日シンガポール大使ピーター タン閣下は金沢に留学されていたということをお聞きして、日本もだいぶ変わってきたなと実感しております。

協会の白石理事長やABK学館の佃校長がお話されたことに一点だけ加えて申し上げますが、この会館はあそこに写真がありますが、穂積五一先生[ii]が発意されまして、私の学生時代、60年以上前に建設作業がはじまったわけであります。ここが完成したときに、４階５階に日本人学生が８人、留学生が20人入寮し、私はその一員として入り友好交流の実をあげたわけございます。今日、福田ドクトリンの除幕式を迎えることができ穂積先生もさぞかし喜んでいらっしゃるのではないかと思います。

実は、福田赳夫先生とこのアジア文化会館とは、浅からずのご縁で結ばれているということを申し上げたいと思います。この会館と直接関係があったのは岸信介先生[iii]です。この財団設立の発起人にもなっていただきましたが、1957年に総理大臣になられたので、代わりに当時総理大臣秘書官だった安倍晋太郎先生[iv]がお見えになってこの財団の設立の決議をしていただきました。

福田赳夫先生は岸先生とは東京大学法学部で上杉真吉先生[v]門下の先輩後輩で、

お二人とも日本を代表する総理になられたわけですが、この協会がまだ海の物とも山の物ともわからない頃、私は穂積先生のお供をして、当時佐藤栄作内閣の下で大蔵大臣だった福田赳夫先生のところに陳情に伺ったことがあります。アジア学生文化協会と同時に設立し、この会館に本部を置いた海外技術者研修協会（AOTS）[vi]の技術研修生の渡航費をですね、当時は滞在費と研修事業費しかついていなかったんですが、新規に予算化していただけるよう陳情にうかがったのです。私は大学を出たばかりだったので、ずいぶん緊張しました。そうしたらおもむろに電話をとって、その場で主計局長に電話し一言「例の件頼むよ。うん」ガチャン、と。それで渡航費が50％補助でついたということがありました。そのようなことを昨日のように思い出します。

この協会のルーツは戦前から東大正門前にある学生寮[vii]で、その寮からは政治家もずいぶん輩出しました。福田康夫先生もご存知かと思いますが、福田赳夫先生の番頭をしていた群馬県から参議院議員になられた山本富雄さん[viii]も寮の先輩であります。山本富雄さんには、私が衆議院に出ると言ったら「バカなことはよせ、止めとけ」とずいぶんお説教されました。政治家とまったく縁も関係もないのに、簡単に後援会ができるわけがないと諭されたのですが、なんとなくこの道に入ってからもお世話になって、ここまでやって参りました。鹿児島県知事から参議院議員になられて総務庁長官を務めた金丸三郎さん[ix]も先輩です。金丸先生にもずいぶんお世話になりました。それから、本日も祝辞をくださった社会党で元総理大臣の村山富市さん[x]も戦前の寮生だったんです。あと何人もいらっしゃいますが、そういういろんな方々のご縁でできており、改めましてお世話になった方々に感謝を申し上げたいと思います。

それから一つ申し上げたいのですが、福田ドクトリンについて、私は2018年に福田ドクトリン40周年を記念してフィリピンで行われた記念プレートの除幕式に、福田康夫元首相のお供をして伺いました。伝統あるマニラホテルの壁面に金属プレートとして設置されました。実は、私

は石碑を作りたかったんですね。その理由は私が弁護士だった若い 30 代のころ、イギリスのロンドン郊外にあるマグナカルタ[xi]、イギリス憲法の一部なんですけれど、その石碑を見たことがあるんです。実に確固たる感じの石碑でございました。それで、福田ドクトリンも私は東南アジアと日本を結ぶ外交・友好の基本として、これからもずっと大事にしてゆかなければならないと思います。そういう意味では日本で石碑で残って欲しかった。それが本日、みなさんのご協力をいただいて実現できたということで、大変嬉しく思う次第です。

（左から）白石アジア学生文化協会理事長、杉浦元法務大臣、（石碑を製作した）株式会社ジーテー貿易の中根勝美会長、中根将晴社長

ⅰ 杉浦正健　衆議院議員 1986 年～ 2006 年　法務大臣 2005 年～ 2006 年　弁護士として活躍中
ⅱ 穂積五一　財団法人アジア学生文化協会、財団法人海外技術者研修協会、社団法人日タイ経済協力協会の理事長を晩年の 1981 年まで勤めた。
ⅲ 岸信介　衆議院議員 1942 年～ 1943 年、1953 年～ 1979 年　内閣総理大臣 1957 年～ 1960 年
ⅳ 安倍晋太郎　衆議院議員　1958 年～ 1991 年　外務大臣 1982 年～ 1986 年
ⅴ 上杉真吉　東京大学法学者（憲法）
ⅵ 財団法人海外技術者研修協会　2012 年より財団法人海外貿易開発協会（JODC）と合併し財団法人海外産業人材育成協会と名称変更 2013 年一般財団法人へ移行。英語略称は AOTS
ⅶ 新星学寮　大正時代上杉真吉東大法学部教授が主催した至軒学堂がルーツ、1932 年穂積五一により再興
ⅷ 山本富雄　参議院議員 1977 年～ 1995 年　農林水産大臣 1990 年　現群馬県山本一太知事のご尊父
ⅸ 金丸三郎　鹿児島県知事 1967 年～ 1977 年　参議院議員 1977 年～ 1989 年　総務庁長官 1988 年～ 1989 年
ⅹ 村山富市　衆議院議員　1972 年～ 2000 年　内閣総理大臣 1994 年～ 1996 年
ⅺ マグナカルタ　1215 年国王の権限を制限し、「法の支配」によるとしイギリス憲法の基本となった。

レセプションご挨拶

福田康夫 元内閣総理大臣

想像以上に立派な石碑でした。顔写真もありましたがあれもうまくできています。最近の技術がいいのか、作った中根さん[vi]の腕が良かったのか両方かもしれませんが、ああいう良い石碑がここに立ったというのは、いまご挨拶された杉浦元法務大臣[vii]が、おそらく火付け役だったのではないかと思います。杉浦先生だから変な物になるはずはないと思っていましたが、思っていた以上の物が出来たと思っていまして、心から御礼を申し上げたい。

このドクトリンの文章を作るにあたっては､外務省の方々は大変ご苦労されました。先ほど申し上げた谷野作太郎さん、当時外務省の課長さんだったでしょうか、中身のある大変良い文章を作っていただいたと思います。

そしてまたこの碑を作るについてはいろんな方に相談しまして、今日お出でになっている田島高志元中国課長[viii]にも相談に乗っていただきました。今日は中国関係の方も多くいらしてますが、このドクトリンは東南アジアだけではなくて世界に通用するものだと思います。そういう意味では中国でもよく研究して欲しいと思っていたら、実は中国の学者で慶応大学の教授である段瑞聡さんという方が、この福田ドクトリンの研究ということで論文を発表されていらした。そういうことなので案外中国にも伝わっているのかなと思っているのです。中国もアジアも含めてこのドクトリンが残っていくということは大変いいことではないかなと思います。

そのドクトリンの「心と心」の交流というその実際の活動をしてきたアスジャ（ASJA）という組織がありまして、これは福田赳夫の提案によってできた留学生交流の協会なのですが、形はちょっと変わりましたが今でも引き続いてよくやっていただいている。そのアスジャの佐藤次郎さん[ix]にはこれまで大変お世話になり、ありがとうございました。今日はその大元のドクトリンを見ていただくということになったわけで、大変良かったと思います。

それからさっきの中国の関係で申し上げ

れば、段瑞聡慶応大学教授のご友人の王敏先生[x]もいらしていただいています。わざわざ神戸からも中国と関係の深い孫中山記念会の片山啓さん[xi]もお出でになっておりますし、本当に皆様方にお世話になったということを重ねて御礼申し上げたい。若干の付言を申し上げてご挨拶とさせていただきます。

vi 中根勝美　株式会社ジーテー貿易（岡崎市石材店）
vii 杉浦正健　第 76 代法務大臣（2005 年～ 2006 年）
viii 田島高志（駐ミャンマー大使 1993 年、駐カナダ大使 1995 年）
ix 佐藤次郎　アスジャ・インターナショナル顧問 ASJA (Asia Japan Alumni) International
x 王敏　桜美林大学特任教授
xi 片山啓　公益財団法人孫中山記念会理事

佃 吉一 学校法人 ABK 学館理事長

本日はお忙しいところ、アセアン諸国との友好の証として、名誉ある「福田ドクトリン記念碑」を公益財団法人アジア学生文化協会と共同で建立させていただき、元内閣総理大臣福田康夫様に感謝申し上げます。また、この記念すべき今日、アセアン諸国からの駐日大使閣下及び関係の皆様に参列頂きましたこと、学校法人 ABK 学館を代表して感謝申し上げます。

さて、学校法人 ABK 学館は公益財団法人アジア学生文化協会からの設立の趣旨を継承し、8 年前に特に日本語教育を軸に、アジアと日本の友好のためにアジアの青年を育成し、人間の絆をはぐくみ、ともにアジアの平和と発展に尽くす目的で設立しました。これまで、特に、アセアン諸国を中心として、日本語教育を現地の日本語関係機関やアジアの大学との連携等を通じて、日本留学及び就職をめざす若者の人材育成に取り組むとともに、今後来るべき日本の多文化社会に対応すべく、アジアからの留学生への人材育成に取り組んでいます。また、この厳しい新型コロナ感染下で留学生の来日は困難ですが、オンライン授業によるアセアン 4 ケ国とのオンライン日本語教育に積極的に取り組んでおります。

この「福田ドクトリン記念碑」の建立を機に、その志を受け継ぐべく、今まで以上日本語教育を通じて一層のアセアン諸国と日本の青年の交流を発展させ、絆をはぐくみ、未来の日本とアセアン諸国との友好と発展に貢献することをお誓い申しあげて、私の挨拶といたします。